

論 説

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究21
P.83-92(2018)

Eriksonの自我発達理論再考 - 主体感と相互性の観点から -

Erikson's Theory of Ego Development Reconsidered : From the Perspective of Sense of Agency and Mutuality

山 岸 明 子¹⁾
YAMAGISHI Akiko

要 旨

本研究の目的は、Eriksonの自我発達理論を「本当の自分がある」という充実感が各時期にどのような形をとるかを表したものととらえることによって、彼の発達段階にもPiagetやKohlberg理論のような論理的な順序性があることを示すことである。Eriksonの第I段階から第V段階では、自分が物事の変化の主体であるという主体感もたれ、それがどのような時に経験されるか、その認知の違いが発達段階の基盤にあり、主体感の経験のされ方やそれを支える他者がPiagetの認知発達や視点の分化・統合に応じて変化しているということが論じられた。Erikson理論に対して个体化に偏っているという批判が見られるが、本稿ではErikson理論においては个体化と関係性の両方が考慮されているととらえ、第Iから第V段階は个体化の発達の過程、第VI、第VIIは関係性の発達であるととらえた。そして第VI、第VIIは第I段階の基本的信頼にみられる相互性が形を変えて自我発達の中核となり、相手へのプラスの働きかけが同時に自分へのプラスの働きかけをもたらすようなやりとりの中で経験される相互性によって自我が充実し強化されること、どのような立場に立って相互性が経験されるのか、その違いが発達段階の中核にあることが論じられた。

キーワード：Erikson、自我発達、主体感、相互性、順序性

Key words：Erikson, ego development, sense of agency, mutuality, sequence

I. 問題と目的

Erikson (1959/1973, 1963/1977, 1964/1971) は精神分析理論の立場から自我発達理論を展開したが、彼の理論はFreudの生物学的・性心理学的発達理論を基盤に、社会的・対人的視点が加えられたものである。Freudの発達段階はリビドーの出現の仕方に基づいているが、Eriksonの自我発達理論はあらかじめ生体に備わったグラウンドプランに従って有機体の各部分がエビジェネティック（漸成的）に発現するという生物

的なものが基盤にある一方、他者・社会とのかかわり方や社会からの要請も考慮されている。生物・心理・社会的要因の相互作用が重視されているが、論理的な順序性は特に考慮されていないと思われる。

一方、認知発達理論のPiaget (1949/1967他)、Kohlberg (1969/1987他) 等の発達段階論においては、後の段階の方が構造的に高レベルであり、発現の順に論理的順序性が想定されている。Piagetの場合は、発達とは均衡化の増大であり、より現実に即した認知になっていく過程、あるいは自己中心的な認知から複数の視点に基づく客観的な認知、状況に規定された具体的な認知から徐々に状況から離れ形式的・抽象的な認知

1) 元順天堂大学
(before) Juntendo University
(Oct. 27. 2017 原稿受付) (Jan. 24. 2018 原稿受領)

表1 4理論における発達段階とその原理及び順序性

	乳児期	幼児前期	幼児後期	児童期	青年期	発達段階の原理	発達段階の順序性
Erikson (発達の危機)	基本的信頼 vs 不信	自律性 vs 恥・疑惑	積極性 vs 罪悪感	生産性 vs 劣等感	同一性 vs 同一性拡散	グラウンドプ ランの出現	なし
(重要な関係)	母親的人物	親的人物	基本的家族	「近隣」・学校	仲間集団と外集団 指導性のモデル	重要な対人関 係の範囲	範囲の増大
Freud	口唇期	肛門期	エディプス期	潜在期	性器期	リビドーの向 かう対象	なし
Piaget	感覚運動的知能		象徴的思考	具体的操作期	形式的操作期	論理的操作の あり方	均衡化の増大
Kohlberg			ステージ1	ステージ2・3	ステージ4・5	役割取得の視点	役割取得の視点の拡大 分化・統合の増大

が可能になっていく過程であるといえる。Kohlbergは彼の道徳性発達段階の方向は普遍的であると主張しており、発達段階の論理性は彼の理論において重要な問題である。彼の6段階はPiagetの発達段階と対応しており、更に順序性を役割取得の視点の増大と明確に規定している。つまり道徳判断をする時に考慮される視点が、自己中心的視点から徐々に分化・統合が進み、より広いものになっていく。そして以前の段階では取られなかった視点を取ることができるようになり、全ての視点を考慮しながら、均衡化された矛盾のない解決ができるようになるのが発達の到達点であるとされる。

表1は上記の発達段階論の乳児期から青年期の発達の基盤にあるもの（その原理と順序性）をまとめたものである。Freud及びErikson理論においては、PiagetやKohlberg理論における分化と統合、あるいは視点の広がり、均衡化の増大といった明白な順序性は考慮されていない。但し表1の第2項目で示したように、Erikson理論も重要な対人関係の範囲が第I段階の「母親的人物」から徐々に広がる（第VIII段階では「人類」まで）という点においては部分的に順序性が見られるが、Eriksonはそれを特に「順序性」と述べてはいない。そしてErikson自身は論じていないが、彼の発達段階にはグラウンドプランの発現という相互に関連性のない順序性だけでなく、論理的な順序性が内在していると考えられる。

本稿の目的は、Eriksonの自我発達理論には論理的な順序性が内在しているということを論じることである。まず彼の自我発達理論の第Iから第V段階は、我々がどのような文脈で「自分」を感じるかという主体感のあり方を問題にしている、どのような行動にどのようなフィードバックがあった時にそれが経験されるのかに関してPiagetやKohlberg理論と関連する論理

的な順序性があることが論じられる。更にErikson理論に対する「人間のもつ2つの側面（分離個体化と愛着や関係性）の前者に偏っている」という批判（例えばGilligan, 1982/1986；Franz & White, 1985；杉村, 1998等。詳細はVI、VII章で述べる）に関して、本稿ではErikson理論にはその両者が含まれていて、発達段階の順序性がその両方に見られることを論じる。つまりEriksonの自我発達理論は、第Iから第V段階は個体化の発達の側面であり、そこでは「主体感」のあり方の変化が発達段階の中核にあり、第VI、VII段階になると関係性の一側面の「相互性」(mutuality)が自我発達の中心の問題となっているととらえ、その観点から各段階のあり方を再構成し、そこにある順序性について論じる（なお第VIII段階については上記の枠組にはあてはまらないため、本稿では取り上げないこととする）。

II. Erikson理論と主体感

山岸(1986, 1988)は「主体感 (sense of agency)」の概念を提示し、自我発達を「自分がある」という感覚＝「主体感」の変化の問題とし、Eriksonの自我発達理論の乳幼児期（第Iから第III段階）を主体感の形式の変化としてとらえる試みを行っている。主体感とは「自分の行動が外界に何らかの変化をもたらしたと認知された時に経験される、変化の原因、主体 (agent) は自分であるという感覚」と定義されている。その理論的背景は山岸(1986)でも述べられているが、White(1963/1980)のコンピタンスや、Rotter(1966)の内的統制、deCharm(1976/1980)の自己原因性や指し手、Bandura(1982)のself efficacy(自己効力感)などと関連する概念であり、個人の内的な経験であると同時に、個人が行動し外界に変化をもたらすという外的出来事に支えられた客観的な経験でもある。

主体感を体験するためには、1) 自分の行動が何らかの成果をあげたと感じられること、そして2) その行動の源泉、主体は自分であると感じられること、が必要である。そして主体感を体験した時に我々は「自分がある」という感覚をもつが、この1)と2)がどのような時に体験されるのか、つまりどのような変化を認知した時に成果を感じられるのか、どのような状況でのどのような行動に際して行動の主体と感じられるのか、それが発達によって異なるということが論じられた。

このような自分が自分の行動の主体であるという観点は、Eriksonの自我発達理論に内在していると思われるが、そのような記述はほとんど見られない。そしてこの考え方の基盤にある認知や認知発達の視点はErikson理論では稀薄である。Eriksonは葛藤外の自我の自律的機能を認める自我心理学派であるが、基本的には葛藤に対処する自我を問題にしているため、認知領域の考察が十分ではないといえる。Eriksonは発達段階の移行をもたらすものを自我の内外におこる変化とし、自我の内部でおこる変化として欲求の変化をあげているが、認知のあり方も関与していると考えられる。そして自我発達を主体感の変化ととらえる立場においては、どのような状況でどのようなフィードバックを得た時にそれを自分の成果とみなし主体感を感じるのかは、発達の重要な要因になると考えられる。

本稿ではEriksonの自我発達理論の第I段階から第V段階は主体感の変化であり、その変化は認知発達の影響を受け、発達と共に単純な主体感からより分化・統合が進んだ主体感に変化し、青年期のアイデンティティにつながると考え、Eriksonの自我発達の過程をその観点から論じてみる。乳幼児期については既に山岸(1986, 1988)で論じられているが、まず第Iから第III段階の自我発達を主体感の観点から簡単に述べる。児童期の自我発達についても山岸(2007)で考察を行なっているが、考察の中心はこの時期に可能になる仲間との「連帯」であり、主体感についての考察は充分ではなかったため、IV章で児童期の主体感について述べてから、V章で青年期の主体感は児童期の何がどう発達したものなのか、どのような特徴があるのか、それは何によって可能になるのかの考察を行う。

Ⅲ. 乳幼児期の自我発達と主体感

第I段階の「基本的信頼」は、母親(的人物)との相互作用の中で、自分の働きかけに母親が応えてくれ

ることからもたれる「自分が働きかければ母親、そして母親を含む世界は自分に応じてくれる」という信頼であるが、それは「自分が働きかければ他者はそれに応じて反応を返す」「他者に変化をもたらしたのは自分である」という対人的主体感でもある。一方Piagetの感覚運動的知能は、乳児の能動的働きかけが外界に変化をもたらし、そのフィードバックを感覚が受け止めることから外界をとらえることを記述しているが、それはもの世界から応答を返されることによって体験される対物的主体感を伴っているといえる。自分の働きかけに応じてくれる世界と、世界から答えてもらえる自分への信頼をもたらすという意味で、これも基本的信頼の一つといえる。つまりEriksonの基本的信頼は「他者」に対する働きかけに基づく「対人的主体感」と「もの」に対する働きかけに基づく「対物的主体感」の2つの主体感から成立しているといえる。

第II段階の「自律」は、例えば排泄のコントロールができた時に体験されるが、それは自分の身体を意図をもってコントロールしようとし、そして意図通りの結果をもたらしたと思えた時に体験される対物的主体感である。第I段階の対物的主体感と違うのは、第一に第I段階のように直接ものに働きかけ、ものから直接的なフィードバックを得るのではなく、自分の身体のコントロールが介在し、身体を使って意図通りの成果を得ることに基づく主体感であることである。第I段階ではものを操作し、ものとの直接的なかわりの中で主体感をもつものに対して、第II段階では感覚運動的要素が減少し、主体感を体験する行動はものへの現実的・直接的な行動そのものではなくなっている。第二に第I段階では対人的主体感と対物的主体感は別々に体験されたのに対して、第II段階では対物的主体感とは他者との関係の中で体験され、他者(母親)に依存し他者に支えられて初めて確かな主体感になっている。つまり対物的主体感とは第I段階のように純粋な対物的主体感ではなく、対人的主体感も含まれるようになるということである。

第III段階になると、幼児はものや自己をどう変化させるかに関する「目的-ヴィジョン」をもち、それが実現化した時、つまりものや自分によって「自分の世界」が作り出された時、以前とは違ったより豊かな対物的主体感-自分がこれを作ったのだ、この世界の主体は自分なのだという感覚を体験する。IIの対物的主体感との違いは、1) 主体感の体験に意図だけではなく、目的が関与していること、2) それまでとは違っ

て断片的な活動－結果ではなく、まとまりをもった自分の世界(遊びという現実と非現実の中間領域である)の主人公になった時に経験されるということ、3)自分の行動を受け止め応答してくれる他者が、母親以外のごっこ遊びを共にする人(必ずしも現実の他者でなくてもよく、主観的・半現実的な他者であるが)にまで広がるということである。

この段階の主体感をもつためには前操作期の象徴的思考が必要である。何を作るかという「目的－ヴィジョン」をもつためには、今あるものだけでなく、ないものをイメージとして思い浮かべることが必要であるし、現実とは異なる世界を作るためにあるものを別のもの(象徴)で表すことが必要とされるからである。

IV. 児童期の自我発達と主体感

1. 児童期に可能になる主体感－児童期の主体感の特徴

児童期になると子ども達は学校に入り、幼児期のように個人的な目標を追って主観的な満足を求めるのではなく、学校・社会で認められた目標、誰もが認めるような客観的な成果を目指すようになる。その背後にあるのは、幼児期から児童期におこる大きな2つの発達の变化－1)家庭中心だった子どもが、学校という集団に所属するようになるという社会的な変化、2)ものごとを客観的にとらえられるようになる(具体的操作期)という認知的な変化である。

この時期になると、子どもは自己中心的な一つの視点、現在自分に見える主観的な視点から物事を見るあり方を脱して、別の視点、複数の視点から客観的にみることができるようになる。子どもは客観的な基準に合わせて自分の行動結果を見るようになり、その基準から見て成果があった時、達成感や有能感を感じる。そしてそれを「自分がやったのだ」と認知する時に、児童期の主体感が経験されると考えられる。

主体感の発達の2つの側面の1)どのような行動において、2)どのような成果があった時に主体感が経験されるのかに関して、1)は遊戯期までに既に自分が意図し自分なりの目的をもつ行動であることが必要になっているが、児童期にはその目的が更に他者一般に認められるものであることが必要になり、2)に関しても自分の主観だけでなく客観的な誰もが認めるような成果を得ることが必要になっているといえる。Eriksonが学齢期の発達課題とした「生産性」は、そのような客観的現実的な成果に基づく主体感と考えら

れる。

なおEriksonは生産性を社会・他者一般に通用する成果をあげることに限定しており、仲間と共同で行う集団遊びを児童期の自我の問題としてとらえていないようである。一方山岸(2007)は児童期の自我発達を主体感の問題として考察する際に、仲間と協力して行う活動を通して検討しており、仲間集団において仲間に認められる成果をあげた時や、集団遊びにおいて協力して目標実現を目指し、成果を共有して「我々がやったのだ」という充実感をもつ時に、児童期の主体感が経験されるということを論じている。

2. 児童期の主体感の不十分さ

児童期の主体感は、Erikson理論が示しているA)社会・他者一般に通用する技術を習得するという生産性をあげた時、そしてB)仲間との集団活動において協力して成果をあげて集団で充実感をもつ時に経験されるが、しかしどちらの場合も「客観的現実的な目的をもちそれに沿った成果を得た時にその行動の主体としての自分を感じる」ということの経験が十分ではないという限界がある。A)社会・他者一般に通用する技術の習得は、誰にでも通用する客観的な成果を目指す児童期の子どもにとっての目的であると同時に、大人－社会が課す教育や訓練の目的でもある。そのためにその達成において、自分が自分の行動の源泉、主体であるという感じが減ずることがおこる。そして大人やまわりの人から承認されている内に、主体感よりも承認そのものを求めるようになっていき、大人の言うままに生きることを目指すようになってしまう場合もあると考えられる。

一方、B)仲間集団における主体感は、客観的現実的な成果に基づく主体感であるが、客観性・現実性の度合いはまだ不十分である。それはその集団に属し共に活動している仲間内においてのみ承認される成果であり、誰にでも通用するものではない。その意味で仲間集団における主体感は、ごっこ遊びがより広い集団になり、客観性・現実性を増したものと言える。

以上のように児童期には2種類の活動において主体感が経験されるが、どちらにも「主体感」としての不十分さが内包されている。その不十分さが満たされるようになるのが、青年期の主体感であり、それがEriksonの自我同一性の達成－確かな自我の確立にあたると考えられる。

V. 青年期の自我発達と主体感

1. 青年期に可能になる主体感—青年期の主体感の特徴

青年期の主体感が児童期の主体感と異なるのは、1) 自分が自分の行動の源泉、主体であると感じることに関して「自分」に関する問い返しがなされること、2) 自分の行動が成果をあげたと感じるための枠組みが時間的・空間的に広がること、3) 個々の行動の成果によって経験されるのではなく、それらを統合する自分の存在全体に意味・価値を感じる時に経験されるということである。

児童期の子どもは日々努力し何事かを達成した、向上したという客観的な結果を得れば、「自分」が明確でなくても「自分がやった」という充実感を感じるということをIV章で述べた。それに対し青年期になると努力し達成をもたらした行動の主体が本当に自分なのか問われる。それは本当に自分の意図だったのか、更にそれまで自明視していた「行動の主体としての自分」に対しても、まわりの他者への同一化によって取り入れられたもの、他の人によって作られたものにすぎず、「本当の自分」とはいえないのではないかと感じる。このような状態になるとそれまでは感じられていた主体感が経験できなくなるが、これはEriksonの自我同一性の危機に該当する。

児童期の主体感と青年期の主体感の第2の違いは、青年期になると行動の成果がただ単に客観的・現実的なものであればよいのではなく、社会的・時間的流れの中に位置づけることが必要になるということである。つまり自分の行動が成果をあげたと感じるための枠組みが変化し、社会の生産性（直接的具体的な生産性というより、他者—社会の総体が期待し共有している抽象的な生産性）につながったり、あるいは未来における生産性につながる時、つまり「今」「ここ」を超えたより大きなものにつながる時に、青年期の主体感は経験される。

第3の違いは、青年は努力した結果そのものではなく、何のための努力なのか、努力した成果が何につながるのかを問い、それに対する答えを得られた時に主体感を経験するということである。青年期の主体感は個々の行動の成果そのものによってではなく、行動全体を規定している一貫した自分の生き方に意味・価値を感じられる時に経験される。この変化は乳幼児期から遊戯期にかけて、「行動がもたらす断片的な結果による主体感」から「まとまりをもつ世界を作ることに

よる主体感」へと変化したことと類似している。どちらもバラバラのものから連続的・統合的なものになっているといえる。そして意味・価値を感じるためには第2の特徴で述べた自分の行動や生き方が社会の中に位置づき、また未来への展望の中に位置づけることが必要であり、そのことで青年は自分の存在に意味、価値を感じ、それまでとは異なった新たな充実感をもつのである。

2. 主体感の変化を支えるもの

自我発達を主体感の形式の変化としてとらえる観点からは、青年が自分及び自分と世界との関係をどうとらえているかという認知的問題が重要であるが、青年期は形式的操作が可能になる時期である。形式的操作期になると、現在の具体的状況から自由になって、仮説の上に立って具体的な内容を無視して論理的に考えることができるようになる。つまり現実がどうかではなく、仮説を作ってそれが現実合うかどうかを組織的に調べる仮説演繹的思考が可能になる。このことは、青年の世界に対する見方や対し方を大きく変える。青年は具体的なことだけでなく、抽象的なことも考えられるようになり、身の回りのことだけでなく、社会全体を考えたり、社会現象の理論的把握もできるようになるし、理想や価値、未来という、今日の前にある現実とは異なった非現実的なものを考えられるようになる。現実には様々な要因が組み合わさった可能性の一つにすぎず、現実とは異なった理想に照し合わせて社会や自分を批判的に見ることができ、また未来を考えてそれと関連づけて現在を考えることができる。そのことが、その時々興味や快感によって場当たりに生きるのではなく、自分の目指す価値や理想、未来への展望の中に日々の生活を位置づける志向をもたらす。

青年期特有の主体感を経験するために必要な要因として、1) 「自分」に対する問い返しがなされること、2) 枠組みの時間的・空間的な広がり、3) 行動に意味や価値を求めることの3つをあげたが、1) のためには自分では見ることができない「自分」について考える抽象的思考が必要であり、現実の自己を批判的に見る目も必要とされる。また2) や3) のためには、社会や未来、理想や価値を考えるという抽象的・一般的思考や、様々なことを関係づけ統合化する思考が必要とされる。それらをもたらすのは、形式的操作という認知の力なのである。

VI. Erikson理論と相互性

Eriksonの自我発達理論に対する批判として、自律的な個の側面が主で、他者との関係性に関する側面が十分組み込まれていないということがしばしば指摘されてきた。例えばKohlbergの道徳性発達段階は男性の発達を描くにすぎないと批判したGilligan(1982/1986)は、Eriksonの理論も男性の視点から構築されていると批判した。彼女は、男性は自他未分化から自他分離・自律・個体化へと発達するのに対し、女性は他者との関係性の中で発達し他者とのつながりや愛着が重要であるのに、Eriksonはそれを発達段階に組み入れていないとした。またEriksonの第V段階の同一性と第VI段階の親密性の順序は、男性にはあてはまるが女性に関しては並行してなされるのではないかという批判(Josselson, 1973; 高橋・関口, 1986)や、その移行に非連続性・相反性があるという批判(Franz & White, 1985)、更に関係性は女性特有の問題ではなく、自我同一性にその観点は必須であるという指摘がなされている(例えば杉村, 1998)。Franz & White(1985)は、生涯発達は個体化と愛着の2つの経路を考える必要があるのに、Eriksonは愛着の発達を第I、第VI、第VII段階以外では考慮していないとして、個体化要因だけでなく愛着要因を付け加えた「生涯発達に関する複線モデル」を提唱している。

本稿でも第Iから第Vまでの発達段階を「主体感」という能動的な個の側面から述べてきたが、第VI、第VIIは段階それらとは異なり、Franz & Whiteの見解と同様、第I段階の基本的信頼が変化したものとする。但し彼らのようにEriksonの自我発達理論に「2つの経路」を設定するというより、彼の8つの発達段階はそのまま、第Iから第V段階は「主体感」の変化として発達が進み、個の発達は第V段階で頂点に達し、その後の自我発達はそれまでとは異なった「相互性」の発達に移行すると考える。

Ⅲ章で、第I段階の「基本的信頼」は、母親(的人物)との相互作用の中でもたれる「自分が働きかければこの人は自分に応じてくれる」という対人的主体感、そして「もの」に対する働きかけに基づく対物的主体感によって獲得されるということを述べた。乳児の働きかけ(泣く・笑う等)を母親は受け止め、それに応答して乳児に快を与えるが、それは同時に母親にとっても自分の働きかけに乳児が反応を返してくれることであり、母親が一方的に働きかけるのではなく、双方向のやりとりであり、相手に満足を与えること

が自分の満足になるような相互作用である。Erikson(1964/1971)はそれを「相互性」と呼び、〈黄金律〉の考察で詳しく述べている。彼はシェークスピアの言葉を借りて「一方は他方を照らし暖め、その結果として他方もはじめ与えてくれた人に熱を返す」とことと説明し、行為をする当事者が「他者を強化しているにもかかわらず、自分自身をも強化し」「『当事者』と『他者』は一つの活動における相手役(パートナー)である」としている。乳児と母親の間ではこの相互性が成立しているが、相互性経験こそが「望みの根源」で、「すべての効果的な行動の根本的成因である」とその重要性が指摘されている。そのような相互性は第IIから第V段階では言及されず、第VIそして世代性が重要になる第VII段階で中核的なものとして再登場している。

VII. 初期成人期の自我発達と相互性

Erikson理論では、同一性を達成すると、自分の同一性を他者のそれと融合させることが目指されるようになり、「親密性対孤立」の第VI段階に入る。親密性とは、他者、特に異性との間に真の親密な関係をつくることであり、多くの場合結婚という形がとられ、持続的な性的関係がもたれる。その関係はEriksonのいう「相互性」－自分の働きかけを相手が受け止め返してくれるやりとりで、相互に働きかけ合って相互的な喜びを得ること－に基づいていて、第I段階の乳児と母親とのやりとりと同様なことが起こっているといえる。そしてその状態を持続させるためには、お互いに相手に合わせる相互調整が必要とされる。

性的な関係においては、自分の快を求める性的行動が相手の快反応を引き出し、それが更に自分にとって快になるという相互性が成立し、相互的な快や充実感が経験される。それは生理的・生物学的要因に支えられていて、自分が性的存在であることを相手が望み、自分の存在や行為が相手に快を与え、また相手から快を与えられる関係で、「男性は女性を、より女性たらしめる時に、より男性になる」のである。そして相手に応じて自分が思っている自分ではなくなり「自らを失う一方、他人の中に自らを見出す」という経験をし、またその行為において二人は「相互調整をし、相手に合わせて、双方の満足に至る」のである(なお結婚生活においては、性的な関係のような身体的な相互性や相互調整だけでなく、別個のアイデンティティをもち、別の人生を生きてきた相手と共に生活するために、お互いに相手に合わせたり妥協することが必要とされる

が、これも「自らを失う一方、他人の中に自らを見出す」という親密性課題なのである)。

Franz & White (1985) は、自我発達には個体化と愛着の2つの経路があり、Eriksonの第Ⅱから第Ⅴ段階にも個体化だけでなく別の経路として愛着の発達もあり、第Ⅵの親密性はその後に位置づくとした。彼らの愛着の発達段階は他者との関係の持ち方の発達であり、Selman (1981) 等の理論に基づいて、自他未分化の段階から徐々に自他分化や自他の観点の関連づけが進むとするものである。確かにその人のことを大切に思い、共にいたいと思う親しい他者をもち、その関係性を変化させていくことは人間の発達の重要な一側面である。しかしEriksonのいう第Ⅵ段階の親密性は、そのような他者とのつながりを求める愛着や親しさとは異なったものであり、その中核は前述の相互性にあると思われる。そして第Ⅰから第Ⅴの段階では相互性の変化は見られず、第Ⅵ段階になって自我発達の中心の問題になると考えられる。Franz & Whiteの愛着の発達の基盤はSelman等の自他の分化や関連づけであり、それは彼らの個体化の経路－本稿の主体感の変化の基盤にもあるものであり、相互性の発達とは異なっていると思われる。本稿では、相互性の発達は第Ⅰから第Ⅴ段階の主体感の発達の後に、基本的信頼の相互性が変容したものと、第Ⅵ段階で親密性として再現すると考える。

第ⅠとⅥ段階の相互性には、第Ⅰ段階では大人から愛を受け世話をされる受動的な立場で相互性が経験される一方、第Ⅵ段階では同等な立場の者との間で相互性が経験されるという違いがある。また第Ⅰ段階では「自分」は明確ではないのに対し、第Ⅵ段階では明確な「自分」をもち、共に別個のアイデンティティをもつ者同士が働きかけ合うという違いもある(青年期にも持続的な性的関係がもたれることもあるが、この意味では充分ではないといえる)。一方どちらの相互性も生物学的基盤をもっているという共通性があり、第Ⅰ段階は無力な状態(生理的早産)で生まれ、親の養護の元で育つという人間の生物学的特徴、第Ⅵ段階は身体の成熟と共に異性を求め、異性との身体的やりとりにおいて快を得るといことが相互性の成立を支えている。

VIII. 成人期の自我発達と相互性

成人期になると、成人は自分のパーソナリティとエネルギーを、子孫を産みだし育てることに結合さ

せたいと願うようになるとし、Eriksonはこの時期の発達課題を、「生殖性対自己吸収」とした。生殖性とは、次の世代をもうけ、それを導くために配慮すること、自分以外のものに力を注ぎ、世話をすることであり、成人期の自我はそれにより強められ発達するのである。

この生殖性課題は乳児期の発達課題の達成と関連しており、成人からの世話を受け、自分の欲求や働きかけに応答してもらう中で基本的信頼は獲得されるが、そのことにより成人も次世代に配慮し育てるという発達課題を達成している。それは「相手の力や可能性を引き出そうとしていながら、同時に自分自身の力や可能性を引き出される」という相互性の経験そのものといえる。そして生殖性課題も親密性と同様に生物学的な基盤に支えられている。女性は妊娠し、出産して母親になり、子どもを育てようになるが、妊娠した時から女性は身体的に胎児を育み産むための環境を自らの体内に準備し、出産後も子どもが育つことができる環境を準備する。例えば母乳を出して与えることが可能になっているが、乳児はそれを飲み満足し、母親も乳児が吸ってくれたこと、満足した様子に満足する。そのような生物学的な助けも借りながら、母親は相互性の経験が可能になるような働きかけをする。それはかつて考えられていたように、生得的な母性本能によるものではなく、経験(特に乳児とのやりとり)の中で学習されていくが、生物学的に可能にされている部分もあるのである。

その後も成人は子どもの発達にかかわり続けるが、子どもが順調に育ち、その力や可能性を引き出されるためには、成人が自分自身のことばかり考え(それが成人期の否定的なあり方－自己吸収である)主体感を経験しようとするのではなく、子どもに応答し必要なものを与え、自分のあり方を子どもの状況や現実に合うように変えながら、子どもに働きかけていくことが必要とされる。

生殖性は典型的には子どもを産み育てることだが、それだけでなく社会において次世代を育てることや、自分が生み出したものや思想を責任をもって育むことも含むとされている。更に「自分以外のものに力を注ぎ、世話をする」ということには、社会で責任をもって仕事をするとも含まれていると考えられる。成人期の発達において職業生活は大きな意義をもつが、「生殖性」という発達課題の観点に立てば、問題の中心は、仕事を通して次世代を育て、社会の人々の役に立ち、

表2 主体感と相互性の発達

主体感		どのような状況・どのような行動で主体感が経験されるか	関連する認知発達	主体感を支える他者
I 乳児期	基本的信頼	自分が働きかけた行動に対してフィードバックがある	感覚運動的知能	対物的主体感—なし 対人的 〃 —母親的人物
II 幼児前期	自律性	自分の意志に基づく行動—意図通りの結果を得る（断片的・瞬間的）	感覚運動的要素の減少	母親的人物
III 幼児後期	積極性	自分なりの目的をもつ行動—目的通りの世界（つながり・まとまりあり）が作れた	象徴的思考	主観的・半現実的他者
IV 児童期	生産性	他者と共有できる目的をもつ行動—客観的な成果	具体的操作	客観的・現実的他者
V 青年期	同一性	他者・社会とつながり、自分の生き方に意味・価値を感じられる行動—成果	形式的操作	客観的・現実的他者（今・ここを越えた他者を含む）
相互性		どのような立場で相互性を経験するか	関連する生物学的要因	相互性をもつ相手
I 乳児期	基本的信頼	大人から愛と世話を受ける立場	無力な存在として産まれる	母親的人物
VI 初期成人期	親密性	別個のアイデンティティをもつ対等な立場	異性を求める存在	親密な他者
VII 成人期	生殖性	愛と世話を与え、未熟な者を育てる立場	子を産み育てる存在	次世代の者

（注）なおⅧ段階の老年期については上記の枠組にはあてはまらないため、本稿では取り上げていない。

ものや思想を育てるといことがいかに実現できているかであると言える。

成人期における相互性の経験は、第Ⅰ、第Ⅵ段階に引き継ぐものであるが、第Ⅰ段階のように愛や配慮を与えられる立場ではなく、また第Ⅵ段階のように対等な立場の者との間でもたれるのではなく、能動的に世話を与える立場に立ち、自分が生み出した世代を責任をもって育てる立場での相互性であるという点が異なっているといえる。第Ⅰから第Ⅴ段階は自分が主体となって外界に働きかけるというように「同化」優位であり、第Ⅵ段階は「同化」と「調節」が同程度、成人期は自分が生み出した対象を育むために、それに自分を合わせながら働きかけるという意味で「同化」もあるが「調節」優位になると考えられる。

なお子どもを産み育てるという生殖性は生物学的な支えがあることを述べたが、ものや思想の創出、職業においては生物学的基盤なしで、心理・社会的に生殖性課題は達成される（第Ⅵ段階の発達課題においても、結婚や子どもを産み育てることは必ずしも必須なわけではなく、別の形でその課題を達成することも可能である）。男性の場合は、自分の子どもに関しても生物学的基盤はなく、女性の方が子育てに関する負担が大きい一方、女性の場合は母親になることで相互作用がスムーズに進むような生物学的支えを得ており、成人期課題の達成はなされやすいといえる。

IX. Eriksonの自我発達理論における主体感と相互性

Eriksonの自我発達理論は「本当の自分がある」という充実感が各時期にどのような形をとるかを表したものと考えられるが、1) 第Ⅰから第Ⅴ段階では自分が物事の主体であるという主体感もたれ、それがどのような時に経験されるか、その認知の違いが発達段階の基盤にあるということ、2) I VI VII段階は他者とのやりとりで経験される相互性によって自我が充実するが、どのような立場でのやりとりなのかその違いが発達段階の基盤にあるということ論じてきた。その全体を表2にまとめた。

主体感とはPiaget等の認知能力の発達と関連し、Piagetの認知発達の最高レベルである形式的操作に対応する第Ⅴ段階で頂点に達する。但し実際の青年期に誰もがそのような主体感を経験するわけではなく、理念的な到達点である。その後は主体感の経験の仕方の発達はなく、その比重が増したりより確かなものになるという変化に留まり、世界に能動的にかかわる中で「自分」を物事の主体であると感じる主体感、青年期のあり方がそれ以降も維持されると考えられる。

主体感とは能動的な個の発達だが、他者との関係がないわけではない。対人的主体感とは他者に働きかけ他者からのフィードバックを得ることで経験される。その意味で他者とのやりとりは重要であるが、但しそのやりとりは自分が働きかけ、原因になるということが重要で、相手から働きかけを受け、お互いに影響し合う

ということは副次的なことである。対人的主体感も相互性も他者との相互作用において経験されるが、対人的主体感は自分が働きかけそれに応じてフィードバックが返ってくることから経験される一方、相互性は自分が働きかけることだけでなく、相手からの働きかけを受けることが同様に重要で、それを引き受けて更に働きかける中で相互調整し、その過程で双方の充実や発達が生じるのである。

そして相互性の経験は、第Ⅰ段階の愛や配慮を与えられる立場での相互性、第Ⅵ段階の対等な立場の者との間でもたれる相互性、そして第Ⅶ段階の能動的に世話をし育てる立場に立った相互性という段階を経ていく。それは自分と相手との相互調整において、自分を調整する割合を増大させていく過程といえる。有限である我々は、能動的な個としての発達を進め世界とのかかわりを広げながら、徐々に自分を受け継ぐ者を育てることに自我発達の中心をシフトさせていくのだと思われる。そしてやがて自分がなくなるという生物としての終焉に向かっていくが、その最後の段階である老年期をどうとらえるかは今後の課題としたい。

引用文献

- Bandura, A.(1982). Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-147.
- deCharm, R.(1976/1980). 佐伯胖訳. やる気を育てる教室：内発的動機づけ理論の実践. 金子書房.
- Erikson, E.H.(1963/1977). 仁科弥生訳. 幼児期と社会. みすず書房.
- Erikson, E.H.(1959/1973). 小此木啓吾訳編. 自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房.
- Erikson, E.H.(1964/1971). 鑓幹八郎訳. 洞察と責任. 誠信書房.
- Franz, C.E. & White, K.M.(1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson' theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Gilligan, C.(1982/1986). 岩男寿美子監訳. もうひとつの声：男女の道德観の違いと女性のアイデンティティ. 川島書店.
- Josselson, R.L.(1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-51.
- Kohlberg, L.(1969/1987). 永野重史監訳. 道徳性の形成：認知発達のアプローチ. 新曜社.
- Piaget, J.(1948/1978). 谷村覚・浜田寿美男訳. 知能の誕生. ミネルヴァ書房.
- Rotter, J.B.(1966). Generalized experiences for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- Selman, R.(1981). The development of interpersonal competence : The role of understanding in conduct. *Developmental Review*, 1, 404-422.
- 杉村和美.(1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し. *発達心理学研究*, 9, 45-55.
- 高橋裕行, 関口昇.(1986). 女子大学生における自我同一性と親密性の発達の研究. *福井大学教育学部紀要 教育科学*, 36, 99-1996.
- White, R.B.(1959/1985). 中園正身訳. 自我のエネルギー：精神分析とコンピタンス. 新曜社.
- 山岸明子.(1986). 行動の主体としての自我の形成－乳幼児期における対人的, 対物的相互作用の役割－. *教育学研究*, 53, 347-354.
- 山岸明子.(1988). 幼児期の自我の発達－遊びにおける対物的主体感を中心に－. *教育学研究*, 55, 329-337.
- 山岸明子.(2007). 児童期の連帯についての発達心理学的考察. *順天堂スポーツ健康科学研究*, 11, 37-48.

Issues

Abstract

Erikson's Theory of Ego Development Reconsidered : From the Perspective of Sense of Agency and Mutuality

The purpose of this study was to show that logical sequence like in Piaget and Kohlberg's stages is included also in Erikson's stages of ego development, by considering Erikson's each stage representing each form of self's fulfillment. We discussed that in Erikson's stages from the first to the fifth it is described under what conditions the sense of agency is experienced, and that these stages progress along Piaget's cognitive development and toward differentiation and integration of perspectives, which influences to experience of sense of agency and the person who supports that experience. While Erikson is criticized that his theorization is slanted toward individuation, we considered that he treats both individuation and relatedness : from I to V are the developmental process of individuation, and VI, VII (and I) are that of relatedness. We discussed that mutuality, one aspect of relatedness, is the core of ego development in these stages, and that there is developmental difference in what kind of position one experiences mutuality.

Key words : Erikson, ego development, sense of agency, mutuality, sequence

YAMAGISHI Akiko